

大森藤ノ  
OMORI FUJINO

イラスト ヤスダスズヒト  
YASUDA SUZUBITO

ダンジョンに  
会い求めるのは  
間違える  
だろうか

9



イラスト・デザイン  
ヤスタスズヒト

今更なる一歩



乱れた呼吸の音が響いていた。

天井や壁面、地面が木皮で形作られた階層域。通路中に繁茂する苔が青や緑に発光し、見る者に秘境を彷彿させる光景を生み出している。轟いてくるモンスターの雄叫びに身を揺らすのは様々な形をした葉や、銀の滴を垂らす神秘的な花々だった。

上層域とは様変わりした大樹の迷宮の中で、一つの影がひた走っている。

影はしなやかで、華奢な、少女と見紛う四肢を持っていた。苔の光を浴びてきらめくのは青銀の髪だ。

そして美しく滑らかな長髪だけでなく、その肌も青白い。

肩や腰に生えた無数の鱗、妖精のものより歪で尖った耳、何より目を引くのが額に埋まる輝かしい紅の宝石。

青白い全身や紅石を始めとした人ならざる器官は、紛れもない『怪物』の証である。

枝のように細い両腕を胸に抱き締めるモンスターは、ただただ迷宮を走っていた。

(どうして?)

モンスターは血を流していた。

爪や牙、剣で切り裂かれたかのような裂傷をいくつも負い、紅血を地面に滴り落としていく。鱗ごと破けた肩の青白い肌は真っ赤に染まっていた。

(どうして??)

瞳の中には恐怖があった。戸惑いがあった。悲しみがあった。

赤い血とともにいくつもの水滴が地面へと落下する。美しい琥珀色の双眸から透明な滴をこぼすモンスターは、そのか細い喉を震わせた。

「どうしてっ……っ?」

小振りな唇から漏れ出すのは、怪物の汚い啼き声ではない、掠れた嘆きの言葉だ。

幼子のように嗚咽交じりの声。あたかもその言葉の羅列を忌むかのように、錯綜する迷路から複数の怪物の吠声か押し寄せる。青銀の長髪と薄い肩が怯えるように震えた。

怪物にはそぐわない、人が息を呑むほど整った相貌を、涙で歪める。

モンスターは——『彼女』は、泣いていた。

(どうしてっ、みんな……!)

『彼女』は一人だった。

迷宮から産まれたばかりの『彼女』は、あらゆる存在から排他されていた。

壁面を破り、産まれ落ちた直後、右も左もわからないまま薄暗い迷宮をさまよった。ここはどこなのかという不安を感じていると、自分と同じ存在の臭いを嗅ぎ分け、『彼女』は本能に従ってそちらに向かった。

やがて迷宮の一角で出くわした、自分より大きな熊獣に『彼女』は尋ねた。

「ここはどこ?」と。

返ってきたのは凶悪な咆哮だった。熊獣は雄叫びを上げ、鋭い爪を振り下ろしてきた。肌を切り裂かれた『彼女』はわけがわからないまま逃げた。

混乱が全身を支配する中、滲み出る赤い血と、産まれて初めて味わう痛みが彼女を恐怖へと駆り立てた。

『彼女』はそこから何度も襲われた。姿も形も違うあらゆる同族達に命を脅かされる。例外はない。傷を増やしていく『彼女』は瞳から溢れ出そうになる何かを必死に堪えた。

迷宮の奥深くから逃げ出し、疲労する『彼女』が次に会ったのは、自分達とは違う異種の存在だった。

剣と弓矢を纏う人間達。

妖精のごとき容姿を持つ耳長の雄と雌、寄り添って互いを守る番の二人。

気付かぬ内に己の瞳に羨望を浮かべた『彼女』は、彼等に近寄った。

驚かさないようにそっと、五指から伸びる鋭い爪を隠しながら、唇を開いた。

たすけて、と。

瞬間、『彼女』は剣で斬り付けられた。

彼等は自分以上の動揺と混乱、何より恐怖をもって『彼女』を拒絶した。

向けられる敵意に再び逃げ出した。男は取り乱しながら剣を振り回し、顔を青ざめさせる女はくぐもった悲鳴とともに弓を構える。

背後から矢を何度も射られながら、『彼女』はとうとう涙を溢れさせた。

痛い。苦しい。悲しい。

鎌を弾く鱗が衝撃とともに縛割れる。切り裂かれ、破かれた肩が焼けるように熱い。己を取り巻く世界から排他され、疎外され、拒絶され、異端の烙印を刻み付けられる。

どうして、どうして、と自問を何度も重ねる。

こわい、こわいよ、と嗚咽を漏らす。

『彼女』は、泣き続けた。

(わたしは、なに……!?)

問いかけを発しても、自分を産み落とした迷宮は何も答えない。

やがて逃げ回る内に、『彼女』を追う人間達が現れた。彼等は『彼女』の美しい容姿に驚愕し、目の色を変えて『待て！』と荒々しい声を放ってきた。

嗜虐的な眼差しと舌舐めずりをする彼等に足を止める道理はなかった。血眼になって追跡してくるその形相は同族であるモンスターより遥かに醜い。もはやあらゆるものに恐怖を覚える

『彼女』は二本の細い脚で逃げ惑う。

怪物と呼ばれる所以である潜在能力をもつて追っ手を振り切り、襲いかかってくるモンスタートを躑躅して、独りで大樹の道を走り続けた。たまった、という孤独な足音をどこまでも続く永遠の迷宮に響かせる。

琥珀色の瞳から、再び透明な涙がこぼれ落ちた。

「あうっ!？」

下り坂。

子供のようには足を踏み外し、木の根に覆われた坂を勢いよく落ちていった。

坂の真下、地面に倒れ伏した『彼女』は足を痛めたことに気付く。立ち上がれない。

聞こえてくる怪物の吠声と人間の足音にびくつと体を揺らし、顔を左右に振り、動かない足を引きずる。既に凝固した血液が『彼女』のこれ以上の足跡を途切れさせる中、迷宮の一角、立木と無数の葉々が茂る物陰に隠れた。

へたり込み、壁に背を付けながら息を殺す。傷付きほろほろとなった体を両腕でかき抱きながら、果てしない恐怖に耐えた。

そこへ、何かが近づく気配。

息を呑む。

刻一刻とこちらへ接近してくる一つの足音——人間の靴の音に、剣で斬り付けられた痛みが熱を放つように蘇り、身が竦んだ。

がたがたと震える体。

頬が乾かない内に新たな涙滴が瞳から伝っていく。

迫ってくる人影を見上げながら、体を抱き竦める両腕にぎゅうと力をこめた。

そして。

涙を流す『彼女』の目の前に、気配の主が現れる。

「モンスター……『ヴィーヴル』？」

白い髪に、深紅の瞳。

薄暗い迷宮の片隅で、『彼女』は一人の少年と出会った。



## 1章 異形の少女



始まりは、とある冒険者依頼だった。

「炎 鳥が19階層で大量発生している。『リトル・ルーキー』、お前も手を貸せ」

18階層までやって来た僕達「ヘスティア・ファミリア」に、『リヴィラの街』から依頼が舞い込んだ。

ダンジョンでは特定のモンスターの大量発生が不定期ながら往々にして起こり、異常事態の一つとして観測される。今回確認された『ファイアーバード』は19階層から出現する稀少種の一つで、名の通り火炎攻撃を行う鳥型のモンスターだ。19階層以下の層域『大樹の迷宮』を度々火の海に変える厄介なモンスターらしく、安全階層である18階層に進出すると空を飛び湖畔に存在する街にも被害を出すらしい。迷宮の宿場町を経営する上級冒険者達は燃やされたら堪ったものではないと駆除に乗り出すところだった。街の住人と協力して炎 鳥の討伐に当たってほしいと、18階層を通りかかった上級冒険者達にも軒並み声をかけて。

王国軍との戦争終結から三日目。ダンジョン探索を再開させ、ようやく自派閥の力のみで辿り着いた安全階層で舞い込んできた強引な依頼に、リリなんかは不服そうな顔をしていたけれど、報酬の良さと、後は状況が状況だったので——炎 鳥の大群を野放しにしている19階層をおちおち探索もできない——渋々引き受けた。

火の耐性を持つ火精霊の護衣のローブを街側が準備し、前報酬として参加者に支給する中、『敏捷』の速さを買われた僕は他冒険者の臨時パーティに組み込まれることとなった。早期討

伐が望まれるので、速度重視の一団に配置されたのだ。

リリやヴェルフ、ミスさん、春姫さんの別パーティと一度別れ、火精霊の護衣を纏った僕は屈強な冒険者達とともに19階層に下りた。

ところが、順調に冒険者依頼をこなしていた僕は気付けば、一人きりとなっていた。

既階層と異なり構造や道筋など勝手がわからない『大樹の迷宮』の中で、炎 鳥を追い回し、あるいは逃げ回っている内に——配置的に殿を務めていたのも仇となったのか——見事に冒険者達に置いていかれてしまったのである。

どことも知れない迷路の一角に立ちつくし、途方に暮れていた、まさにその時だった。人影らしきものを視界の奥に捉えたのは。

片足を引かず、何かから逃れるように迷宮の植物が生い茂る物陰へと身を隠す。

負傷した同業者かと慌てて駆け寄った僕は、直前になって何か様子がおかしいことに気付き、警戒を払って物陰に近寄った。

そして——。

「モンスター……『ヴィーヴル』?」

目の前の存在に、愕然とする。

青白い肌に、少女のような華奢な四肢を持った人型のモンスター。第三の目を彷彿させる

額の紅石を見て、かろうじて竜種『ヴィーヴル』であることを察する。

『ヴィーヴル』。

あの一角獣と並んで、ダンジョンの中でも群を抜いて絶対数が少ない最上位の稀少種だ。

中層域19階層から24階層に出現し、発生する『ドロップアイテム』は鱗だらうと爪だらうと破格の額で取り引きされると聞く。中でも額の紅石『ヴィーヴルの涙』は巨万の富が約束されているほどの価値があり、『幸福の石』とまで呼ばれている。

けれど額から宝石を奪われると『ヴィーヴル』は凶暴化し——本体を倒すと紅石は必ず砕け散ってしまう——これまで多くの冒険者が惨殺されたという記録が残っている。最強のモンスターである竜の種族だけあって、その戦闘能力は非常に高い。

本来ならば、竜女は半人半蛇のように人型の上半身と蛇に酷似した下半身を持つ、女体竜尾のモンスターなんだけど……。

(……本当に、モンスター?)

整った相貌、何より琥珀色の瞳から流れる涙に息を呑む。

衣類を何も身に付けていない生まれのままの姿。

竜の胴体の代わりに生えた細い二本の脚、慎重しやかな乳房。

肌の色や鱗さえ目を瞑れば、僕と同じくらいの女の子にしか見えない。

「……、……、……」

竜女は、泣いていた。

眼前で立ちつくす僕を見上げながら、両腕で抱き締めた体をがたと震わせている。

モンスターであることを忘れたように怯え、人間のように恐怖をあらわにしている。ありえない、と頭の片隅が囁いていた。

まともな思考ができない。動揺に動揺を重ねる。目の前の光景がとてもではないが信じられなかった。

だって、そうだ、モンスターは人類の敵。

本能のまま僕達に牙を剥き、襲いかかってくる絶対の殺戮者。凶悪な破壊衝動の塊に理性や感情が介在する隙間はない。

モンスターは、『怪物』なのだ。

(——その筈なのに)

怪物が人類に与える筈の嫌悪感、忌避感が発生しない。

無条件に僕達を抗争へと駆り立てる、モンスターに対する闘争本能が欠片も湧いてこない。むしろ今の僕は、人に近いこの容姿を前にして、刃を突き立てることに抵抗を覚えている。

こんなモンスター、見たことがない。

「う、あ……!」

「!」



竜女の瞳が、装備している《神様のナイフ》に釘付けとなつて、目撃にナイフごと手を背に隠してしまふ。何をやっているんだ、と心の中で呟くも、目の前のモンスターが僅かに和らぐのを見て益々混乱してしまつた。

この『ヴァーヴル』は、『亜種』？

異常事態にも数えられる、モンスターの突然変異体？

（怪我を……いや、傷を負つてる）

凝固した血に染まる肌、鱗ごと破けた肩の傷が視界に入り込んでくる。

同業者に斬られたのだろうか、傷だらけの竜女は座り込んだまま僕を恐れて必死に距離を取ろうとしている。だが背後は壁だ、いくら後ろに下がろうとしても意味はない。

僕は動けなかった。

モンスターは厄災を運んでくる象徴。

間違つても同情や、ましてや助けの手など伸ばしてはいけない。

立ちつくしたまま、怯える竜女と視線を絡ませ続け、確かな感情を宿すその瞳に止めを刺すこともできず……僕はとうとう、後退してしまつた。

何の行動にも踏み切れないまま、何も見なかったことにし、情けないまま逃げ出す。

僕は竜女に背を向け、その場から立ち去つた。

「……」

目の前から人間が消え、竜女は瞳を濡らしたまま、不思議そうな顔をした。

静寂に包まれる中、恐る恐る視線を左右にめぐらし、ゆっくりと立ち上がる。

痛めた足を庇うように迷宮壁に両手をつき、壁に沿つて移動を始めた。

直後、ばさりと。

体を引きずりながら移動する竜女の背後、通路と直結した横道から、紅の大鳥が羽の音とともに姿を現す。全長二Mを超すモンスター『ファイアーバード』は瞳を血走らせながら、その巨大な嘴を開いた。

背後から押し寄せる熱気に硬直する竜女、宙を浮遊したまま狙いを定める怪鳥。

黒犬を優に超える高出力の火炎放射に、細い足は地を蹴ろうとするが、間に合わない。

嘴の奥で燃え盛る炎が、振り向く竜女の顔を照らし、今まさに放たれようとした瞬間――。

「ゲエツ!?」

僕は、《神様のナイフ》を閃かせていた。

疾走、そして跳躍を経て斬りかかり、炎鳥を紫紺の斬閃で両断する。

発射直前だった火炎が中空で花火のように爆散し、伴つて『魔石』を斬り裂かれたモンス

ターは灰となって吹き飛んだ。

膨大な火の粉と灰粉が宙に舞う中、竜女がへたり込み、僕もまた地面に着地する。

(……ああ、もう)

やってしまった、と。

逆手に握った《神様のナイフ》を見下ろしながら、深く項垂れる。

場から立ち去った後も、後ろ髪を引かれ竜女の死角から背後を振り返っていた僕は、炎に襲われる瞬間を前に、飛び出してしまった。

立ち竦むモンスターを……いや、『彼女』を見て、足が動いてしまったのだ。

(この広いダンジョンの中で、たった独り……)

人間に斬りつけられ、人間に怯えるのはわかる。

でも、同じ怪物にも訳もなく襲われるなんて。

余計な思考が芽生えるのがわかった。馬鹿なことを考えるな、と理性ががなり立てている。

でももう、この手は馬鹿な真似をしでかしてしまっている。

ぐしゃ、とナイフを持っていない左手で前髪を掴み、呆然とする竜女に歩み寄る。

彼女は先程と似たような体勢でこちらを見上げていた。

恐怖と動揺、当惑。そしてほんの少しの、絶えような眼差しを送ってくる相手に、僕は手の

平を湿らせて散々懊悩した後——力なく笑った。

もう、駄目だ。

もう、どうにでもなれ。

僕はもう、この娘を殺せない。

「——大丈夫、怖くないよ」

片膝を突き、同じ目線で、眉を下げながら笑いかける。

竜女はまるでこちらの言葉がわかったかのように、双眸を見開いた。

力と痛みでモンスターを屈服させる調教者も、怪物に話しかけるなんて間の抜けたことをきつとしないだろう。僕は半ばヤケになりながら怪我をしている相手の体に視線を走らせた。

肩の傷と、後は折れているかもしれない左足が酷い。僕はレッグホルスターから「ミアハ・ファミリア」製の高等回復薬を取り出した。

正体不明の薬が詰まった試験管に、壁際で座り込んでいる竜女はびくつと体を揺らす。

「平気だよ、これは回復薬って言うって——」

「ぼー、しょん……っ」

——喋った。

何度目とも知れない、自分の常識が崩れる音が耳の奥から聞こえる。

返事なんて期待せず気休めのつもりで話しかけていた僕は、もう、下手糞な空笑いを浮かべることしかできなかった。

モンスターにも効果があるのか緊張を覚えながら、回復薬を破けた肩に垂らす。出血の痕を残してすぐに塞がった傷口に安堵を覚えていると、彼女は僕とは真逆に驚いていた。高等回復薬は折れた骨も治癒することができるけど……下手に骨を復元すると、足の形にずれが生じるらしい。『魔法』でも道具でも、正統な治療法と手順を踏まなければ支障を残すことになる。真つ当な治療方法を知らない僕は、ひとまず火精霊の護衣の裾を力ずくで破り包帯代わりにして、ナイフの鞘と一緒に細い足へ巻き付け固定しておいた。

「……」

裂傷を負った青白い全身に治療をあらかた済ませた僕は、地面に膝をついたまま、彼女と見つめ合う。

青銀の長髪を流す竜女はうろたえているようだった。両手を小振りな胸の前で合わせながら、正常な瞳孔を持つ双眸を揺らして、唇を薄く開いては閉じるのを繰り返している。

露出した胸に熱が頬へ集まるのを何とか堪えながら、やはり違う、と。

先日遭難した『ベオル山地』で見た『ハーピー』——醜悪な人型のモンスターとも一線を画している。僕達からかけ離れた外見も、ここまでくるといつぞ神秘的にすら感じられた。

異形の怪物……異形の少女。

人にもモンスターにも似つかわしくない存在に、僕は喉をかすかに引きつらせる。

「——探せつ、まだ近くにいます筈だ!？」

その時だった。

僕達のいる通路に荒々しい声が届いてきたのは。

竜女の少女は肩を跳ねさせた。次には治まっていた震えを纏い直す。

恐怖に抱き締められる姿と、そして迫ってきている複数数の激しい足音に、睜目した僕は反射的に火精霊の護衣を脱いで、彼女に被せる。

青白い肌的一切を包み隠すのと、武装した冒険者達が現れるのは、同時だった。

「おいっ、てめえ、竜女を見なかったか!？」

通路の壁際で背を向けている僕のもとに、大声を張りながら四名の男女が歩み寄ってくる。不味い、と直感した。

傷付いたこの娘と冒険者達の関係を瞬時に理解し、守らなければ、とそう思ってしまった。全身を隠しているこの娘はすぐに怪しまれる。紅の護布の下で今も震えている細い手を握りながら、思考を全力で回転させた。

ゆっくりとなる時間の流れ。興奮している冒険者達の荒い息を背で聞きながら、滴る汗を頬に感じ——そして手もとにある空になった試験管に、はっとする。

僕は一か八か、一世一代の演技に臨む気持ちで口を開いた。

「それよりっ、回復薬はありませんか!? 仲間が炎鳥に襲われて——火傷が!」

壁に寄りかかる彼女に視線を縫い付けたまま、取り乱した様子で叫び返す。空の回復薬、火精霊の護衣の中で療養する体、周囲には先程爆散した炎、鳥の火炎の残滓。ここで何があったのか推測した冒険者達は眉をひそめたようだった。

文字通り余裕のないこちらの声音も功を奏したのか、必死に助けを求める僕に彼等は舌打ちして唾を返す。面倒事を嫌い、稀少種の行方を捉えようと急いで駆け出していた。

「完璧に冒険者達が去っていったのを確認して……僕は盛大に脱力する。」

「な、何とか……」

なった、と眩きながら火精霊の護衣をずらすと、竜女が小動物のようにおすおすと顔を出した。

あの冒険者達も、同業者である僕が稀少種に止めも刺さず回復薬で治療していたなんて、夢にも思わなかったのだろう。

モンスターを助けていた——そんな姿を見られたら、僕もどうなっていたらどう？

……駄目だ、考えたくもない。

いなくなつた冒険者達の影に未だ怯える少女の前で、思わず嘆息が漏れそうになつた。

「えつと……動ける、かな？」

立ち上がり、手を差し伸べる。

竜女である彼女はここにいれば冒険者達に狙われ続ける。間違いなく、無残な死を遂げる

ヴィイグル

だろう。

差し伸べた手と、僕の顔を交互に見ていた彼女は……ほんの小さく、頷いた。

恐る恐る伸ばされる手が僕のものと同なる。驚くほど冷たい細い手を握って、その体をぐつと引き起こした。

身長は一五〇センチといったところだろうか。火精霊の護衣のローブをフードごとしつかり被らせ、正体を隠した後、僕は彼女に肩を貸して移動を始めた。

（戦う音は聞こえてくるから……そっちに向かつて、後は何とかするしか……）

臨時パーティとはぐれ、この階層の道筋はもう僕一人ではわからない。

冒険者依頼を受け、正規ルート付近で炎、鳥を相手取っている同業者のものと思しき交戦音を頼りに足を進める。後はリリに強引に押し付けられた即席の階層地図を見比べ、18階層への進路を見つけるしかない。……できれば、誰にも見つからないように。

足を負傷した彼女を支えて庇いながら、とんでもないモンスターと遭遇しないようにと心の底から願った。いざとなつたらこの娘を抱きかかえ、全力疾走するしかない。

「……」

熊獣や大甲虫など素敵した側から速攻魔法で追っ払う僕の横顔を、人からもモンスターからも狙われる異形の少女は、じつと見つめていた。

琥珀色の瞳を湿らせ、かと思うとうつぶさ、ぐすつと嗚咽らしきものを漏らす。

やがて身を寄せて、肩や首もとに顔を埋めてきた。生温かい吐息とすんすんと鳴らしてくる鼻の感触に——迷宮内で緊張を途切れさせてはいけないっていうのに——赤くなってしまう。か細い。そして柔らかい。

外見通り女の子のような体に赤面しながら、ヒューマンとして、冒険者として失格だと僕はつくづく思った。

この童女が綺麗だから助けたのか。容姿が人のように整っているから手を差し伸べたのか。だとしたら、僕はもう救えない。

あの祖父だって、女の子を助けてでかしたと、今の僕を見て褒めてくれるだろうか？

……今回ばかりはあの人も唸ってしまっ気がする。

それほど僕は常識から外れたことを行っているのだ。

モンスターを、助けるなんて。

「……………ありが、とう？」

直後、彼女が呟いた。

はっとして視線を下ろすと、目尻に涙を溜めた瞳が、こちらを見上げている。

紅のフードの中で小さく首を傾けている彼女に、僕は口では言い表せない感情——それこそ人同士の間で生まれる温かなもの——を確かに覚えた。

固まってしまった僕を、童女の少女は不安そうに見つめてくる。

無垢な幼児のような言動に、様々な葛藤がこの時だけ溶けてしまった僕は、苦笑した。

「大丈夫だよ」

安心させるように、僕がもう一度笑いかけると、彼女も小さく笑ってくれた。

目を瞑って寄りかかってくるこの娘を受け止め、腹をくくる。

僕達と同じように笑う彼女を、守ろうと。

問題は……リリ達に、何て説明しよう？

しばらくさまよった後、僕達は何とか19階層の正規ルートを見つけることができた。

簡易地図を片手に進み、冒険者からもモンスターからもこそこ隠れながら、18階層の水晶の光が溢れる出口に辿り着く。

「——嘘じゃない、モンスターが喋ったんだ!!」

「どうして信じてくれないの!？」

18階層と19階層の連絡路を上って、巨大な中央樹の樹洞から顔を出すと、出入口前の草原には街の住人達と冒険者達が集まっていた。

集団の前では、男女二名のエルフが叫んでいる。

取り乱した彼女達の話の内容にときっとした。隣を窺うと、童女の少女は斬られた肩を手で抱きながら、怯えた様子でエルフの冒険者達を見ている。

「あー、おい、こいつ等に宿を紹介してやれ。夢見のいい枕が置いてある場所だ」

「ボールス、本当なんだ！ 本当にモンスターが……!?!」

モンスターが喋ったという眉唾物の話を、街の大頭であるボールスさんを筆頭に誰もが真に受けていないようだった。

僕はエルフの冒険者達の騒ぎに乗じて、樹洞から素早く抜け出す。

「ベル様！」

「ご無事ですか！」

「ったく、心配したぞ」

「みんな……」

大して注目されないまま巨大樹の根もとから離れる僕に、【ヘスティア・ファミリア】のみんなが気付いて駆け寄ってくる。

冒険者依頼中に臨時パーティとはぐれた報せを聞いて心配していたのか、リリ、命さん、ヴェルフの順で安堵の言葉を送ってきた。

「……? ああ、ベル様、そちらのお方は……?」

そして、リリ達と同じようにほっとした笑みを浮かべていた春姫さんが、火精霊の護衣に包まれた彼女の存在に気付く。

動揺する僕は「あっちへ……」とだけ言っただけで足早にこの場を離れた。

街ではなく階層東部、安全階層に広がる水晶と木々の大森林に向かう僕に、リリ達は首を傾げながら付いてくる。

中央樹と冒険者達が見えなくなるまで森の奥へ進んで、ようやく足を止めた。

青水晶の輝きに囲まれた開けた空間で、仲間と向かい合う。

「それで、ベル様? どこのだなたなのですか、その方は? まあた面倒事と一緒に、誰とも知れない女性の方を助けてきたのですか?」

何か誤解しているリリは棘のある口調で、僕に寄り添う彼女へ歩み寄り、深く被っているフードの中身を覗き込もうとする。

「ずかずかと接近したりりに、「あ」と怯える彼女は後ずさりしようとして、失敗した。痛めた足のせいで体勢を崩し、僕が咄嗟に支え——反動でフードが滑り落ちる。」

「!!」  
瞬間、時が凍りついた。

あらわになつた青白い肌、そして額の紅石を目にしたリリ達は驚倒し、次には凄まじい速度で臨戦態勢に移る。

地を蹴って後退するリリ、背の大刀と腰の刀の柄を掴んで身構えるヴェルフと命さん。春姫さんは口もとを両手で覆い、その翠の双眸をあらん限りに見開いた。

一瞬で張り詰めた空気に、僕は息を呑み、側にいる彼女もまた全身を強張らせる。

「……どういことだ、ベル」  
 「春姫殿、こちらへ」

竜女の少女から視線を引き剥がさず、ヴェルフが問いかけてくる。

今まで聞いたことのない声音で詰問され僕が狼狽する一方、命さんは硬直する春姫さんを背に隠した。

今日までがそうであったように、ヴェルフ達はモンスターである彼女を警戒している。

「ま、待って、みんなっ、この娘は……!」

「離れてください、ベル様!! 一体何を考えておられるんですか!」

右手のハンドボウガンを構えるリリが、弁明を遮って絹を裂くような悲鳴を上げる。

栗色の瞳には非難と混乱の色が宿っていた。

「綺麗な顔をしているからって、連れてきたっていいんですか!」

「ち、ちがっ……!?!」

「これでは『怪物趣味』だと疑われても仕方ありません!!」

『怪物趣味』。

言葉の通り女面鳥体や半人半蛇を始めたとした人型のモンスターに欲情してしまう異常性癖人物を指す言葉で、下界では最大級の蔑称だ。

つまり、それほどモンスターは人類に忌み嫌われている。

「ベル様っ、怪物は怪物です!! 調教ならまだしも、変な情など移さないでください!!」  
 モンスターは——人類の敵です!!」

そのリリの余裕のない発言が、ヴェルフ達の反応を、今の状況の全てを物語っていた。  
 馴れ合うことのできない人と怪物の関係。至極当然の主張。

遙か『古代』、僕達の祖先を滅亡の危機にまで追いやり、今日まで殺し合いを繰り返してきたモンスターは、共存不可能な存在である。

警戒を緩めないヴェルフ達に代わって、リリは必死に僕へ訴えかけた。

「犬や猫じゃないんです!! ベル様、早くそこからどいてください!!」

「ベル」

「ベル殿」

竜女の少女を庇う僕に武器を構えるリリが警告し、ヴェルフも、命さんも呼びかけてくる。  
 荒事に慣れていない春姫さんだけが、何もできずに視線を何度も巡らせていた。

初めて向けられる仲間の剣幕にどうしようもないほど何もできず、けれど背後にいる彼女を庇うのを止められないでいると。

リリ達に怯えていた異形の少女が、そこで何かに気付いたように、僕の顔を見上げてくる。

「……ベル?」

唇を開き、彼女が言葉を発した瞬間、リリ達は絶句した。

「あ、う、うん……僕の、名前」

「なまえ……？」

「そ、そう。僕はベル」

「ベル……ベルはなまえ……名前は、ベル？」

リリ達が僕に向けていた呼び名を反芻するように、彼女は僕の呼称を繰り返す。

そしてモンスターが喋ったという現象を目の当たりにし、リリ、ヴェルフ、命さん、春姫さんは愕然としていた。

警戒を忘れ、この娘を見つめることしかできなくなる。

「ベル、ベル」

名前を理解したのか、彼女は片手で僕の指をぎゅつと握ってきた。

ベル、ベルと刷り込みされたかのごとく名前を何度も口にし、その青白い体を寄せてくる。まるで頼るものがこれつきりしかないように。

「モンスターが……喋った」

「冗談だろ……」

命さんとヴェルフが呆然と呟いた。

二人の手が、掴んでいた得物の柄から僅かに浮く。

怪物にはありえない弱々しさ、そして儂い姿に、迷いが生じている。

「ベル、様……その方とは、何があったのですか……？」

声を震わせながら、それでも話を聞こうとしてくれる春姫さんの勇氣と優しさに、僕は感謝した。

「19階層で、この娘を見つめました。怪我をして……冒険者にも、モンスターにも襲われていて……震えながら、泣いていたんです」

だから連れてきた、とたどたどしい口調で説明した。

上手く力が入っていない細い足、様々な感情に揺れている琥珀色の双眸。

あらゆるものを恐れて僕に縋り付く彼女を見て、ヴェルフや命さん、春姫さんは口を噤む。

「僕は……この娘を助けたい」

「……怪物を保護しているなんて知れたら、【ヘステシア・ファミリア】は終わりです……」

僕の願望に対し、先程から動揺しているリリは、顔を力なく左右に振って呟いた。

派閥の団長としての立場に苦しめられながら、それでもみんなに大いに託びながら、僕は自分の我儘を——胸中の思いを言ってしまった。

「それでも、見捨てたくない」

情けない顔をしながら、目を逸らさない僕に、リリはぎゅつと唇を噛む。

ややあって、リリはあたかも以前の自分を重ねているかのように竜女の少女を見つめた。

僕やヘステシア様達に助けられた当時の記憶を思い出しているのか——とうとう、がつく



りと項垂れる。

「もう、好きにしてください……」

リリが右手のハンドボウガンを下ろす。

ヴェルフや命さんも武器から手を離し、無言のまま臨戦態勢を解除した。

剣呑な雰囲気が消え、童女の少女が恐る恐る僕やみんなを見回す。

おろおろとする春姫さんを中心に流れ出す当惑の空気が、誰もがどうしたらいいかわからず、動けない。

【ファミリア】に果てしない迷惑をかけることを後ろめたく思いつつ、僕は意を決して自分の考えを口にした。

「ダンジョンにいたら、この娘は冒険者やモンスターに襲われる……ホームに連れて帰りたい。そこで、神様にも話を聞きたい」

保護という目的以外にも、この異形の少女は何なのか、ヘステア様に意見を仰ぎたい。あるいは教えてもらいたい。

僕がそう言うのと、ヴェルフ、命さん、春姫さんは反対しなかった。

思わずというように苦笑するか、あるいは錆びたような動きで頷いてくれる。

最後に、リリは一人、大きな溜息をついた。

「地上に帰還するとしたら、夜です。少しでも冒険者がいない時間帯に……人目がない時を

狙って、摩天楼施設を抜けなければ」

間違ってもモンスターを保護しているとバレてはいけない。地上に戻った冒険者達が酒盛りに耽る後を狙って帰還した方が賢明。リリは参謀役の立場からそう助言してくれた。

我儘を聞いて、その上で尽力してくれるサポーターに頭が上がりない気持ちで一杯になる。

「リリ、ごめん……ありがとう」

「……もういいですつ。ええつ、そうですともつ。どんなに無茶苦茶なことを言われたって、リリだってベル様を見捨てることなどできないのですからっ」

どこか拗ねたような口調で、リリは赤くなりながらそっぽを向く。

申し訳なく思いながらも、嬉しい気持ちの方が勝ってしまった。

リリが言ってくれたその言葉に、胸の中を感謝で溢れさせる。

どこかぎこちなかったヴェルフ達も、リリのそんな姿にいつものような笑みを漏らした。

「地上……?」

「うん。僕達の家には、行こう」

笑うヴェルフや春姫さんにリリが真っ赤になって怒るのを脇に、不安そうに指を握ってくる彼女に微笑を落とす。美しい童女は僕をじっと見上げた後、小さく笑った。

ぽふっ、と音を立ててこちらの首もとに顔を埋めてくる。

少々うろたえながら小柄な体を受け止めた僕は、おもむろに頭上を仰いだ。

森の切れ間から見える階層の天井は、夥しい青と白の水晶が発光を弱め、「夜」の訪れを告げようとしていた。

闇に包まれる白亜の巨塔。

迷宮都市の中心で天高く伸びる『バベル』、そして中央広場は夜を迎え閑散としつつあった。代わりに、方々では酒場を中心に喧騒が溢れ、色とりどりの魔石灯が輝きを放っている。

闇夜が深まるうとも都市の勢いは衰えない。繁華街は活況を呈し、復旧の目処が立ちつつある歓楽街は色欲に耽っていく。場末の酒場が軒を並べるとある路上では酔った女達と神々がまるで宴のようにダンスを踊っていた。賑わいに満ち混沌としている街並みを、周囲を囲う堅牢な巨大市壁が今日も見守っている。

探索を終えた冒険者達が街中に散らばり都市全体が盛り上がる、そんな中、パーティがまた一組、ダンジョンから遅れて帰還してくる。

白髪のコスプレマンを中心にした六人組のパーティは、人通りが疎らの螺旋階段を進み『バベル』地下一階の大広間に辿り着いた。

足早に去っていく彼等を——広間の天井画、美しい蒼穹の絵画が見下ろす。

そして、天井画の一角に埋め込まれた極小の青玉が、僅かな輝きを放った。

「——不味いぞ、ウラノス」

闇に声が響く。

神殿を彷彿させる石造りの広間。

唯一の光源である四炬の松明がばちと音を立てて一部の闇を切り裂く中、台座の上に置かれた水晶を見て、声を発する者がいた。

僅かな肌の露出もない、全身を黒衣で包んだ謎の人物。両手には複雑な紋様が刻まれた漆黒の手袋を身に付けており、言うなれば影が人を象ったかのようだった。

性別さえ判然としない黒衣の人物は、台座上の水晶を見下ろし言葉を続ける。

「理知を備えるモンスターが、冒険者達と接触した。今、『バベル』を出る」

水晶には『バベル』地下一階——天井画の青玉を通した光景が映し出されていた。

青水晶にはヒューマンの少年、そして火精霊の護衣に包まれた少女が浮かび上がっている。

黒衣の人物は少年に寄り添うその少女を、はっきりと『モンスター』と断じた。

「モンスターを連行しているのか？」

「いや、どうか……水晶越しでは保護しているように見える」

黒衣の人物が水晶の光景を観察する他方、四炬の松明の中心地から重々しい声音が響く。

松明の火に照らされ闇に浮かび上がるのは、石製の巨大な神座であり、そこに腰かける巨大な老神だった。

二Mを越す巨軀にロープを纏う男神は、彫像のような表情を変えず問いを重ねる。

「冒険者は誰だ、フェルズ」

フェルズ、と呼ばれた黒衣の人物は答えた。

「ベル・クラネル。【ヘステイア・ファミリア】だ」

水晶に映し出されるのは、白髪に深紅の瞳。

もたらされた内容に、老神は己の蒼色の瞳を細める。

「都市を賑わす新人冒険者……男神のお気に入りか」

「どうする、ウラノス」

「……様子を見る」

黒衣の人物に指示を仰がれた老神は静かに瞑目し、瞼を開けるとともに答えた。

「いいのかい？ 【ヘステイア・ファミリア】は良くも悪くも都市の注目を集め過ぎている。

何かことが起きた後では……」

「女神の眷族だ、我々が追う件の狩猟者達でないことは間違いない。何より……」

神の瞳は台座に置かれた水晶の奥、浮かんでいる少年の顔を見据えた。

「見極めた。女神の眷族達が何か変化をもたらすか……『彼等』の希望になりえるか、否

かを」

沈黙の後、黒衣の人物は頷く素振りをする。

「わかったよ、ウラノス。貴方の神意に従おう」

ばちっ、と松明が火の粉とともに弾けた。

「『巨』を放て。ベル・クラネル達、そしてモンスターの少女を監視しろ」

「ああ」

静謐な石造りの広間の中。

翻る黒衣が、闇の奥へと姿を消した。

試し読み版はここまで！  
続きは本編にてお楽しみ下さい！

試し読み版

ダンジョンに出会いを求めるのは  
間違っているだろうか9

発行 2015年9月30日 初版第一刷発行  
著者 大森藤ノ  
発行人 小川 淳

発行所 SBクリエイティブ株式会社  
〒106-0032  
東京都港区六本木2-4-5  
電話 03-5549-1201  
03-5549-1167 (編集)

装丁 ヤスダスズヒト  
株式会社ケイズ (大橋勉/菅田玲子)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。  
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを  
することは、かたくお断りいたします。  
定価はカバーに表示してあります。  
©Fujino Omori

Printed in Japan

GA 文庫

